

「自分の考えを適切に書く力」を育成する国語科学習指導の在り方

－「子どもとともにつくるルーブリック」を生かした単元づくりを通して－

川俣町立福田小学校 福島県教育センター 長期研究員 樽井 奈緒子

1 研究の趣旨

OECD 生徒の学習到達度調査 2018 年 (PISA2018) では、自分の考えを他者に伝わるように記述できず、問題文からの語句の引用のみで、説明が不十分な解答が多い傾向が見られた。また、平成 31 年度全国学力・学習状況調査によると、「書くこと」領域の平均正答率は 52.1%で、他の領域と比較しても、その正答率が低いことがわかった。その中でも「目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くこと」の正答率は、27.2%と特に低かった。「書くこと」領域の授業改善は本県の喫緊の課題といえる。しかし、実際の「書くこと」の指導では、児童の作品を教師が添削し、できた作品を発表して終わる授業がいまだに多く見られる。このような授業では、他でも使える汎用的な力として、「書き方」を身に付けさせることができない。

以上のことから、「書くこと」の指導において、児童が作品を完成させるまでの学習過程を大切に単元を構想したいと考えた。児童自らが自他の「書き方」のよさに気づき、自分の考えを適切に書く力を育成することを目指し、本研究を進めることとした。

「書くこと」領域の指導において、以下の手だてを講じれば、子ども一人一人に「自分の考えを適切に書く力」を育成することができるであろう。

【手だて 1】学んだ「書き方」を自覚させるルーブリックの作成と活用

【手だて 2】自他の表現のよさを引き出す「共有」場面の位置付け

【手だて 3】児童自ら学習過程を選択させる判断の場の設定

2 研究の概要

(1) 【手だて 1】学んだ「書き方」を自覚させるルーブリックの作成と活用

本研究では、ルーブリックを児童自身が作成し、そのルーブリックを活用して、自他の作品を評価したり、改善したりする活動を単元に位置付ける。ルーブリックを作成する過程において、児童が「何を学ぶか」を自覚し、「何が身に付いたのか」を実感できるようにする。

(2) 【手だて 2】自他の表現のよさを引き出す「共有」場面の位置付け

学習過程の中に自他の表現を比べる「共有」場面を設定する。「グループの共有」と「全体の共有」の二段階の「共有」を行い、ルーブリックを活用して自己評価や相互評価をさせる。

(3) 【手だて 3】児童自ら学習過程を選択させる判断の場の設定

「共有」後に自分の文章の過不足を捉え、どのように改善していくかを児童に選択・判断させる。児童は「情報を集め直す」「構成を考え直す」「記述し直す」という 3つのプランの中から自分が戻る段階を選択し、個人にあったプランを立てる。

3 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 児童自身がルーブリックを作成したことで、学んだ「書き方」が可視化され、児童自らよりよい「書き方」を選択して使うことができるようになった。児童はルーブリックを基に、より高いレベルを目指し、自分の力で作品を完成させることができた。

② 「共有」の場面で、互いに「書き方」を検討し合うことで、児童は自他の「書き方」のよさに気付くことができた。また、それまで無意識に使っていた「書き方」を意識させることで、何を学んだかを明確にすることができた。

(2) 今後の課題

○ 児童の自己評価と教師の評価との間にズレが見られた。完成した作品を評価するだけでなく、学習過程の中に意図的に教師の評価場面を入れていく必要がある。